

序

柔らかな寝台に寝そべり、天井を見上げた。細工を施された装飾とは別に、星々ほしほしが描かれている。以前のこの宮の持ち主の残したものだ。建物の至る所ぜいに贅の限りが尽くされている。趣味の合わない家具や絵は運び出させたが、建物自体に施された手は簡単には消せない。塗りつぶすこともできたが、それはしないでおいた。

前の住人がなぜここを去ったのか、詳しくは知らない。だが聞かずとも理由は限られている。

下から蹴落とされて堕ちたのか。上から嫌われて堕とされたのか。あるいは宮中を上手く泳げずに殺されたのか。

狂って死んだ、というのではないだろう。この住人はそうならぬよう十分な《蜜》ネクトを与えら

れている。だが、自ら死んだ、という可能性はある。ここから見える風景は一見美しく、その実、ひどく醜い。それに耐えられず命を断つ者がいても不思議ではない。ここまで上り詰めたのに、そんな繊細さが残っていたのか。その問いは横に置いておく。

偽りの星々^{ほしほし}を眺める。前の住人は、これを見てなにを思ったのだろうか。

サイドチェストの呼び鈴を鳴らせば召使いが来る。多少横暴に振る舞っても許される力がある。《蜜》の心配はない。ここに住まう《欠けたもの^{リレ}》は特別だ。《華弁持ち^{ラヴァル}》より重宝される。

ここの住人は、《欠けたもの》が望める最も高い頂のひとつを得ていた。

けれど、ここは豪奢^{ごうしゃ}な檻^{おり}だ。

広く自由に見えて、決して外には出られない。鎖^{つな}は繋がれたまま。

しかし、《蜜》のためにひざまずく他の《欠けたもの》とは違い、ここでは逆に《華弁持ち》がひざまずく。私の《蜜》を受け取ってく

ださい、と。そして国に尽くす貴方の助けにならせてください、と。

《欠けたもの》は等しく、国に生かされ、国のために息をする。この住人も同じだ。

みじめに《華弁持ち》にひざまずいて生きたかったかと問われれば、否と答える。ここまで^は這い上がったのは幸運だ。だが幸せかと問われれば、首をかしげるしかない。

ここは酷く冷たい。暖かさはない。ただ生きて、生きて、生きるだけ。国のために尽くすだけ。天上も天下もない。他の《欠けたもの》よりは生きやすい。それだけだ。そこに喜びはなかった。

時折、ひゅう、と体の中を風が通り抜ける。その度に、指先から凍てついてゆくような心地がする。

《欠けたもの》に望めるすべてを手に行っているはずだ。腹も減らず、へりくだることもなく、わがままを言っても許される。それは自分の才^{つか}覚で掴み取ったものだ。

——これ以上、望めるものはないだろう？

しかし、その声に、答える者はいなかった。

メルクアトル

山越えは、思った以上に容易で早く終わった。
理由の大半はエドウィンにある。

任せてくれと言ったとおり、彼は無駄のない
道順でジンたちを導いた。荷車のない三人旅だ。
幅広い街道にこだわる必要もない。加えて、三
人のうち二人はそれなりに鍛えている。山歩き
に不慣れでも、多少の無理なら押し通せた。

山林の濃い静けさを抜け、町並みが視界に現
れた瞬間、思わず息が漏れた。予想より二日も
早い。すごいな、と口にする、

「色々^{いろいろ}と歩き回りましたから」

エドウィンは柔らかに笑った。そして眼帯で
隠れていない方の目を、隣を早足で歩くものへ
向ける。

「それにこの子もいましたから」

番犬代わりの犬だ。山の半ばを己の庭にしてきたのか、ところどころでジンとレオンを支えてくれた。

自分が話題に上ったと理解したのか、犬は顔を上げ、ぱたぱたと尻尾を振る。慣れた手つきで頭を撫でるエドウィンに、ジンは何度目かの確認をした。

「本当にそいつを誰かに引き取ってもらうつもりなのか？」

「ええ、一緒にいても仕方ありませんし」

確かに、そうではあるのだが。

当初、エドウィンは犬を村で引き取ってもらうつもりだったらしい。村へ手紙を届け、その返答と、邪魔にならない程度の荷——乾燥肉や茶葉など——を背負わされて犬はエドウィンの下へ帰ってきた。エドウィンは犬から荷を受け取った後、もう一度村へ向かわせようとしたが、犬は動こうとしなかった。何かを察したのか、てこでも動かぬという顔で。結局、そのまま山越えに同行させることになったのだ。

あのときとは打って変わって、犬はいま、はっはっと白い息を漏らしながら軽快にエドウィンの横を歩いている。番犬だけでなく、他の仕事もなんなくこなすだろう。そう思える優秀さがある。犬の行く先に思いを巡らせていると、不意にレオンが声を上げた。

「門扉だ」

顔を上げる。まっすぐ前を見る。

小指の爪先ほどの大きさだが、その先に門扉があった。石造りの壁に、鉄の門が^は嵌め込まれている。目指していた場所——メルクアトル。そして、ジンにとって初めての他国だ。

自然と体に力が入った。レオンと目が合い、互いに小さく笑みを交わす。思わぬこともあった。けれど、ここまで来た。

昼過ぎ、三人は門扉をくぐり抜けた。

まずは商会へ挨拶——というより、無事を伝えに彼らの拠点へ向かった。

商会はジンとレオンをメルクアトルへの旅路への護衛として雇ってくれたのだが、ジンは途

中で崖の下へ落下、レオンは商会を無事にメルクアトルへ送り届けた後、すぐさまジンを探しに戻ったのだ。最低限の義理は果たしているが、それでも顔は見せる必要があるだろう。

大通りを少し外れた場所に、その商店があった。

こぢんまりとしているが、年季の入った面構えが実直さを感じさせる、しっかりした建物だ。店内へ足を踏み入れた途端、外との光量差で視界がふっと沈み、目が一瞬くらんだ。と、そのすぐ側で驚愕きょうがくの声が上がった。

「ジンさんっ?!」

瞬きしながら振り向くと、仰天した顔のクリスがいた。最後に見たのは、あの崖から落ちる直前だ。レオンから無事は聞いていたが、たしかに怪我はなさそうだった。ただ、以前よりやつれて見える。冬も本格的だ。風邪でも引いたのだろうか。

クリスは番台から勢いよく飛び出してきた。激突すると思ってジンは受け止めるように手を広げたが、クリスは手前で急ブレーキをかけ、

ぴたりと止まった。目を丸くしていると、「ジンさん……？」と、幽霊でも見たかのような顔をされる。ジンは笑って手を差し出した。

「ちゃんと生きているぞ……って、おいっ」

クリスが震える手でジンの手を包み、^{せき}堰を切ったように涙を落とし始めた。

泣かれるとは思っていなかったジンは、やり取りを見守っていたレオンに目で助けを求める。だが返ってきたのは^{あき}呆れた視線だけだった。助力は得られないらしい。クリスと初めて会うエドウィンは、ただただ困惑している。

片手を^{つか}掴まれたまま所在なくしていると、騒ぎを聞きつけたのか裏から男が出てきた。クリスの父親——ジンたちの元雇い主だ。

息子が泣いていることに驚いた顔をした男は、泣かせている相手がジンだと分かると、さらに目を見開いた。無事だったのか、という問いに、ジンは短く^{うなず}頷く。

「ええ、運良く。……途中であんなことになってしまって申し訳ありませんでした」

「いや、我々も君を待たずに^{われわれ}出立してしまっ

た」

ジンの行いは『護衛』の範囲内だ。状況を考えれば、商人たちが探さず先へ進んだのも致し方ない。互いに確執はない、という確認だけで会話は落ち着いた。

父親と簡単な情報のやりとりを終える頃には、クリスは泣き止んでいた。とはいえ、まだぐすぐすと鼻を鳴らしている。話の途中で父親に引き渡そうとしても、ジンの手を離さなかったのだ。父親にも「そのまま握ってやっていてくれ」と言われ、ジンは片手を握らせたまま、もう片手で背を撫でていた。

後はレオンが引き継ぐというので父親との話は任せ、ジンはクリスと番台の裏へ回って椅子に座る。エドウィンは店内を興味深そうに見回っていた。

「ジンさんが、無事で良かったです」

目元を赤く腫らしたクリスが、^{つぶや}呟くように言う。ジンは苦笑した。レオンからも何度も言われた言葉だ。彼らの目の前で、ジンは崖から落ちた。^{おおかみ}狼に^か肩を噛まれたまま。

「心配させて悪かったな」

ぐしゃぐしゃと髪をかき回すように撫でる。
すると、クリスの口から「でも」と細い声が漏れ、ジンは手を止めた。しゅんと肩を落とし、悔いるように眉を^{ゆが}歪めている。

「僕がなんにも考えず皆から離れたから……」

「誰かになにか言われたか？」

「……はい。お父さんとか……他の人にも」

「だがあれは俺も油断していたからなあ」

ずいぶんと叱られたのだろう。元気いっぱいのおしゃべり者が、青菜に塩をふりかけたようにしゅんとしている。ジンが慰めるように軽い口調で言うと、クリスはおずおずと顔を上げた。それに笑いかけて——はあ、とため息が漏れてしまった。少年へのものではない。ジン自身への呆れだった。

「俺も、レオンに叱られたよ……」

遠い目をする。調子が戻った後、随分じっくり話し合わされた。道から外れるのを止めなかったレオンも悪いが、油断したジンも悪い、と反省会もどきをしたのだ。かなり特殊な状況だ

ったとは思うが、まあ……いまこの少年に言うことはひとつだけだ。

「次はお互い気をつけような」

結局のところ、そういうことになる。なんだかんだ、ジンは生きているのだ。じゅうぶんに反省をしたのならば、次は気をつければいい。

クリスはぱちぱちと目を瞬くと、強張っていた表情をほどいて、控えめに微笑んだ。白い肌に、泣き腫らした痕が痛々しい^{いたいた}。かわいい顔をしているから、なおさらだ。

そう言うと、クリスがきょとんと目を丸くし、じわじわと頬を赤くした。

「か、かわいいって……。……………僕のことかわいいって思いますか……。？」

「え、ああ……」

もしや「かわいい」というのは嫌だったか。しかしクリスはまだ子供の域を出ないし、体つきも小柄だ。格好いいより、可愛いの方がしっくりくる。

再び俯^{うつむ}いてしまったクリスを、ジンは少し心配^{のぞ}になって覗き込んだ。

「あの、ジンさん……！」

「——ジン、そろそろ行こう」

ぱっと顔を上げたクリスの言葉を遮るように、レオンの声がかかった。「ああ」と答えつつクリスを見るが、なぜか彼はレオンの方を見ている。互いに視線で何かをやりとりすると、クリスはそっとジンの手を離した。眉を八の字にして名残惜しそうな顔をしている。それを^{ぶぜん}無然とした顔でレオンが見ていた。

よく分からないまま「それじゃあ」と手を上げる。と、クリスに呼び止められた。

「あの、しばらくここにいるんですね」

「ああ」

「それじゃあ、なにかあったらまた来てください！ 割引……はお父さんが許してくれないと出来ないですけど、僕、頑張りますので！」

苦笑して礼を言おうとしたところで、ジンはふと思いついた。

「なあ……」

少し屈み、内緒話をするようにクリスの耳へ口を近づける。

「——ってできるか？」

「はい、さがしてみます……」

頼んだ内容に、クリスはこくこくと頷いた。声も小さく、こちらに合わせしてくれる。と、ぐい、と腕を引かれる。驚いて振り向くとレオンが難しい顔をしていた。待たせすぎただろうか。

今度こそ別れの言葉を、と思ってクリスの方を見て、ジンはぎょっとした。クリスの顔が、湯だったみたいに真っ赤だった。「大丈夫か?!」と声を上げると、クリスはふるふると手を振る。額に手を伸ばそうとしたが、レオンに止められた。

「大丈夫だそうだ、もう行くぞ」

そうして、ぐいぐい引っ張られる。クリス自身も「だいじょうぶです」と言うので、気になりながらも店を出た。

「あ、来ましたね」

店の外ではエドウィンが待っていた。機嫌が良さそうなので理由を聞くと、ジンがクリスと話している間に店主と商談をしていたらしい。不要な薬草を売ったのだという。「結構な値段

になりましたよ」とほくほく顔のエドウィンに、レオンが呆れた目を向ける。かなり有利な交渉をしたらしい。

「この子の次の飼い主も、ここで見つけてくれるそうです」

「そうか……」

店の主人は合理的だが、あくどいわけではない。やり手らしく人脈も多いとか。きっと合う主人を見繕ってくれるだろう。次の主人が見つかるまでは世話もしてくれるらしい。ここで別れた。

「ありがとうな」

ジンが犬の頭をぐりぐりと撫でると、犬は気持ちよさそうに目を細めた。店から貰^{もら}ったのか、いつの間にか首輪と綱が付いている。エドウィンも「元気で」と言って優しく毛を漉^すいた。その横顔が、少し寂しそうに見える。犬も別れを理解しているのか大人しかった。

店の中から出てきた使用人に綱を渡すと、エドウィンは最後にもう一度、犬の頭を撫でた。エドウィンが立ち上がっても、犬は座り込んだ

ままだった。歩き出しても付いてこない。けれど店先で、エドウィンの背をじっと見送っていた。

中の上程度の宿を取った。部屋は清潔で、ベッドも人数分ある。ジンはもっと手頃な宿でも構わないと言ったのだが、金がまったくないわけでもないし、ある程度のセキュリティは必要だ、安全を金で買えるならそれに越したことはない——そう説得され、口を閉じた。商人に勧められた宿でもあるらしい。

「まずは……食事だな」

きりりとした顔でレオンがそんなことを言うので、思わず笑ってしまった。だが確かに腹は減っている。エドウィンも異存はないのか頷いた。

宿に荷物を置き、近場の飯屋に入っていくつか料理を頼む。数分後、運ばれてきた皿を見てジンは目を瞬かせた。

料理が、妙に鮮やかだった。クレイドナではあまり感じなかったが、比べると向こうは地味

だった。野菜を切って塩で味を付ける、煮てシチューにする、そんな類だ。彩りへの意識も薄かった気がする。いや、こちらが派手なだけなのだろう。鶏肉に玉ねぎ、じゃがいもらしきもの。だが、見たことのない野菜も混じっている。ふわりと立つ香りは美味そうなのに、味の予想がつかない。

横を見ると、エドウィンは気にせず手を付けている。彼はこの国に滞在したことがあるらしい。対してレオンは、ジンと同じように難しい顔で皿を睨^{にら}んでいた。

「この赤いものはなんだ……？」

「ん、トマトですね」

「すごい色だが、本当に食べて大丈夫なのか？」

「ええ、美味しいですよ」

まさにジンが聞きたかったことを、レオンが代わりに聞いてくれた。エドウィンがもぐもぐと平然と口へ運ぶのを見て、ジンもフォークで鶏肉を刺し、恐る恐る口に入れる。そして、顔がぱっと明るくなった。

独特の酸味が先に来て、豊かな香辛料が鼻へ抜ける。鶏肉は噛めばほろりと崩れ、旨味とソースが混じって美味しい。続いて、赤いもの——トマトがのったチーズを口に入れる。……酸味とまろやかな乳の味がよく合い、これもまた美味しかった。

パンに皿の汁を吸わせて食べる。それも良い。

難しそうな顔で皿を睨んでいたレオンも食べてみれば口に合ったのか、黙々^{もくもく}と速い速度でフォークを動かしている。彼は基本、食事中にあまり話さない。

「美味しいな……」

「ええ、美食の国としても有名なんですよ」

「へえ、豊かな国なんだな」

ジンの言葉に、エドウィンが頷く。レオンも目線だけで聞いていることを示した。

「そうですね、気候としてはかなり安定している国ですし——それに」

テラス席で食べていると、道の先がざわつき始めた。何事かと視線を向ける。人垣が割れ、その奥から上質そうな制服に身を包んだ男たち

が現れた。胸を張り、威厳を誇示するように歩く。先頭が最も位が高いらしい。ひとりだけ制服の色が違い、胸元には金に輝く星のバッヂを付けていた。

「《欠けたもの^リ》を多く保有する、軍事力のある国です」

そう語るエドウィンの横顔は、どこか冷たさを帯びていた。

華美な集団が去った後、その場で詳しく聞こうとした。しかしエドウィンは「あとで宿で話しましょう」と、有無を言わせぬ笑顔を浮かべた。ジンたちは残り少ない皿の中身を平らげると、足早に宿へ戻った。

部屋に戻り扉を締めた途端、レオンが口を開く。

「あの集団は《華弁持ち^{ラ ヴ ァ ル}》たちか？」

「それもいたとは思いますが、一番先頭は《欠けたもの》です」

落ち着いた口調で返された言葉に、レオンが信じられないとでもいうように目を見開いた。

ジンも首を傾げる。

これまで聞いてきた話では、《華弁持ち》は神聖視され、《欠けたもの》はどちらかという
と蔑視される存在だった。前の国——クレイドナではどちらも高い地位に就いていたが、市井の様子を見ると、前者は敬われ、後者は言葉こそ丁寧でも、どこか見下されていた。

ジンとレオンの困惑に、エドウィンは柔らかく笑った。

「この国は特殊なんですよ」

そう言って、メルクアトルでの彼らの扱いについて話し始めた。

まずこの国では、他国と逆に《欠けたもの》が《華弁持ち》より上に置かれる。どちらも普通の人間より高い地位を得やすいのは同じだが、ただ《蜜》^{ネクト}を与えるだけの《華弁持ち》より、実際に働く能力の高い《欠けたもの》の方が有用と考えられているらしい。

他国で《華弁持ち》を輩出した家が安泰と言われるように、この国では《欠けたもの》も同じように言われる。国に所属する《欠けたも

の》の家族には、本人の給与とは別に毎月報奨が出る。そのため子に独特の^{あざ}痣ができると、^{き き}嬉々として国へ報告される。子は祝福の後、国に召し上げられる。

そして能力に見合う《蜜》を与えられ、職務をこなす。《欠けたもの》の力は普通の人間の数倍から数十倍とも言われる。優遇する価値があると国は考えているのだ。

レオンはどこか^{ぼうぜん}呆然としたまま呟いた。

「メルクアトルは《欠けたもの》が生きやすい^{うわさ}噂には聞いていたが、それほどとは……」

「ああ、他国にも^{けんでん}喧伝しているらしいですね。メルクアトルは《欠けたもの》の理想郷だと」

どこか皮肉げにエドウィンは口元を歪めた。その表情が気になりつつ、ジンはレオンへ疑問を投げかける。

「レオンは噂を聞いて、この国へ行こうとはしなかったのか？」

「思ったことはある……、が、師匠が行くなと言っていたんだ」

それで俺達はぎりぎりまでその選択肢を考え

なかった。レオンは項垂れるようにそう答えた。

レオンの『師匠』——彼とその幼馴染^{おさなじみ}に生き方を教えた相手だ。ジンが眉を寄せると、エドウィンはその言葉を肯定した。

「レオンくんの師匠さんの言葉は正しいと思いますよ」

エドウィンの目が細められる。

「この国は《欠けたもの》の理想郷——その噂に釣られた者が集まると、どうなると思いますか？」

「……《欠けたもの》の数が増える」

「ええ、それで？」

はっとして、ジンはエドウィンを見た。

「《蜜》が足りなくなる……？」

エドウィンは「よくできました」と言うように頷いた。

《欠けたもの》の数に対して、《華弁持ち》の数は少ない。増えた《欠けたもの》を維持できるだけの《蜜》を得られるのか、という話だ。

そもそも《華弁持ち》は《欠けたもの》と違い、生まれた時からそうだと分かる。稀^{まれ}なこと

がない限り母国に縛られるだろう。ならば『稀』が起きたとき、この国を選ぶか？ きつと否だ。この国では《華弁持ち》の地位が他国より低い。

「そのとおり。《欠けたもの》の数に対して、圧倒的に供給する《蜜》が足りなくなります。そこでどうするか……手中に納めた《欠けたもの》に階級を付けるのです」

「階級？」

「ええ。この者は魔法力が高く有用であるため上級を、この者は上級ほどは高くはないが有用のため中級を、そしてこの者は普通の人間より力は強いが有用性に欠けるため下級を……といった具合に。そして階級に合わせて《蜜》を支給する。上級には痣を消せるほどの量を、中級には上級の余りを、下級にはさらにそれらのおこぼれを」

まるで歌うように囁きながらも、エドウィンの瞳には明確な侮蔑が滲^{にじ}んでいた。

「人が集まれば、平均か、それ以下に属する者が大多数を占めるのが道理です。ですがこの国

にとって必要なのは優秀な者のみで、それ以下の者はどうでもいいようです。上位に位置する者だけが大切にされる」

「……それでは、『大切』でない者たちはどうなる？」

エドウィンは溜息^{ためいき}を吐くように答えた。

「私がいた頃は、対処が難しい高レベルの魔獣を狩るために連れて行かれていましたね。倒した後には帰ってきた者は、ほとんどいないようです」

「それは……」

ジンはそれ以上を言えなかった。悲しそうにこちらを見るエドウィンの目が、すべてを物語っていた。

部屋を重苦しい沈黙が支配する。誰も口を開かない。

ジンは息を吐き、切り替えるように言った。

「今後の話をしよう。この後はレオンの、幼馴染の話は聞けばいいんだよな」

「あ、ああ」

ジンの勢いに押されるようにレオンが頷く。

どこかほっとした様子だった。

「人海戦術かな」

「そうだな、それがいい」

「エドウィン、なにか気をつけることはあるか？」

「そうですね……彼が何者かはもちろん、私達
が何者かも話さないように、というのは前提と
して、城の近くにはいかないほうが良いかと」

「なにかあるのか？」

「不審な動きをすると捕まりますから。今はど
うか分かりませんが、以前は、もの慣れない様
子で門扉をうろうろしているだけでも話を聞か
れていましたね」

——他国から流れ込んだ《欠けたもの》が、
たまに居るからでしょう。

エドウィンの言葉に、レオンの顔が少し青く
なる。

「だが、あいつが《欠けたもの》として保護さ
れていたら……」

ふむ、とエドウィンは顎を撫でた。

「そこは私が探ってみましょう。昔の伝手はも

うほとんどないでしょうが、残っているものもあるかもしれません」

エドウィンは複数の国から逃げてきたのだと言っていた。ジンはそれを心配したのだが、エドウィン^{いわ}曰くしこの国については、追われて出たわけではないらしい。

「この国の基準では、私は下級——研究を評価されれば中級の上まで行けるかもしれませんが——一見の能力としては下級でしょう。そしてレオンくんも、中級から下級ですかね。……その幼馴染さんは、どれくらいの能力でしょうか」

「俺は力で、あいつは魔法だが強さとしては俺のほうが強い。が、あいつは頭は回るから勝負しても同じくらいだった」

「なら、中から下というところでしょうか」

追加でいくつか注意を受けた後、ジンたちは宿を出た。

日が暮れるまで、と期限を決めて解散したが、ぎりぎりまで粘っても収穫はなかった。

そもそもこの国は人の出入りが激しいという。観光にも力を入れているのか、町並みはたしかに綺麗^{きれい}だった。だが、人が多いということは、ひとりひとりの印象が薄いということで。三人で地図を大雑把に分割し、担当の店を回って聞き込みをしたが、誰もが「知らない」と首を振った。

それでも、もしかしたら自分以外が何か掴んでいるかもしれない。そう思ってジンは、暗くなった道を宿へ戻った。

しかし、先に戻っていたエドウィンは、ジンを見ると無言で首を振る。一番遅く帰ってきたレオンも肩を落としていた。

ギルドに聞いても「個人情報ですので」と梨のつぶて。国にも、それらしい人間は登録されていないらしい。

だが、まだ初日。しかも半日だ。

「しばらく腰を据えて聞きまわってみるか」

総括してそう言ったジンに、ふたりは頷いた。

夕食の後、しばらく外にいてと言ってふらり

と出ていったエドウィンを見送り、ジンはレオンに《蜜》を渡した。始めの頃は拙かった互いも、この頃は要領が良くなった。《蜜》は甘美で、そういった作用もあるようでレオンの目が潤みはするが、心情としては性的なふれあいというより、親鳥が雛^{ひな}に口移しをするそれに近い。それでも他者の視線があるところで行うには羞恥があり、エドウィンも気を使って外へ出てくれたのだろう。山でも何度かあったやり取りだ。

「部屋、分けたほうが良かったかもな」

「だが、金がない」

ぽつりと漏らしたジンの言葉を、レオンはぱっさり斬った。一時的なプライバシーのためだけに部屋を分けるほどの資金はない。道中で稼いだ護衛の金——初日に挨拶へ行った際、ジンの分は割増にしてくれた——と、エドウィンの薬草の金、その他元々^{もともと}の持ち分を合わせても、量は知れている。この宿だって一月いられるかどうか。

ただ、ジンが思ったのは一時の気まずさだけの話ではない。

「そうなんだけどな。でも、エドウィンは研究がしたいと思うんだ」

「ああ……それも、そうだな」

エドウィンの家を出るまでの数日、荷造りをしながらぎりぎりまで部屋に籠もっていたのを、レオンも知っている。彼の荷物の八割は研究に関する機材や本だ。

だがこの部屋は、荷物を広げるには些^{いささ}か狭い。宿では人の目もある。研究には向かない環境だ。

「まあ、レオンの幼馴染を見つけるのが先決なんだが」

優先順位は当然そちらが上だ。それはエドウィンも分かっているだろう。だが、いつもやっていることができないのは、ストレスにならないだろうか。以前なら、この時間は研究室に籠もっていたのだ。

幼馴染の話題で肩を落としたレオンの背を叩^{たた}く。これからだ、と励ますと、レオンは難しい顔のまま頷いた。

その後帰ってきたエドウィンにそれとなく《蜜》のことを聞くと、やんわりと「葉を飲む

から大丈夫だ」と言われた。……やはりプライベートを護る意味でも、部屋の分割は必要かもしれない。

出会い

その後、三日かけて聞いて回った。結果は空振り。それでもここ以外に手がかりがないのだ。探し人の最後の目撃情報は、この国だった。

ジンは空振り続きで重くなる足をどうにか動かし、初めて見る屋台の店主に声をかけた。どうやら決まった曜日に店を出しているらしい。

商品である串焼きを二本頼み、世間話のついでのように探し人を見たことがないか尋ねる。だが返ってきたのは、いつもどおりの一言だった。——知らない。

とはいえ店主は噂好きらしく、聞いてもいないことまでべらべらと喋った。「焼き立てをやるよ！」と親指を立てられたので、まあそれならと黙って耳を傾ける。

「なあ兄ちゃん、それよか夜に気をつけたほうがいいぜ」

「なんでだ？」

店主は意味深に声を潜めた。

「最近人さらいが出るらしくてな、若い奴が消えてるんだと。しかもみんな美少年らしい！兄ちゃんは少年って歳じゃねえが、美青年だからな！」

美青年ついでにお代もまけてやるよっ！ とがははと笑われ、ジンは苦笑した。礼を言って商品を受け取る。

道すがらさっそく肉にかじりつきながら、ここ数日で図らずも仕入れた噂^{うわさばなし}話を思い返す。

どこそこの家は金を隠しているだの、どこの旦那が浮気をしただの。頼んでもいないのに、耳へ入ってくる。ジン自身はあまり自覚がないが、どうやら自分はそこそこ見れた顔をしているため多少は人目を引くらしい。愛想笑いを浮かべて尋ねると、今のように口が滑らかになり、親切なのかおせっかいなのか分からない忠告まで添えられる。便利ではあるが、時間は有限な

ので、ほどほどにしてほしい。

しかし誘拐の噂^{うわさ}だけは何度も聞いた。この頃は憲兵も警戒に出ているらしい。実際に起きている話なのだろう。消えているのが本当に美少年ばかりかどうかは怪しいが。噂は得てして派手に誇張される。

肉を食べ終えるころには、目的地はすぐそこだった。数日前に訪れた店先に立つ。

「ジンさん！」

扉をくぐるとすぐ、クリスが子犬のように駆けてきた。

久しぶり、と言え、お久しぶりです！、と元気な声が返る。店主である父親は休憩中らしく、今は店にいるのはクリスだけだという。

「例の話はなにか分かったか？」

「……申し訳ありませんが、進捗はないです」

ジンが尋ねると、クリスはしゅんとして眉を下げた。背後に垂れ下がる尻尾の幻覚が見える。

もともと、クリスたち商人には世間話のついでに「レオンの幼馴染^{おさななじみ}を探している」と伝えてあった。国に着いたら聞いてみる、とも言われ

ていたが、そちらも収穫はないようだ。

ジンはぽりぽりと頬を搔^かく。

「あー、じゃあ、もう一つの方は？」

「は、はいっ！ それは大丈夫です！」

クリスはぱっと目を輝かせた。この子は本当にくるくると表情が変わる。彼はぱたぱたと奥へ消えたかと思うと、すぐ戻ってきた。

「これです！」

箱を受け取って中身を確認める。ジンは口元を緩めた。

「……いいな」

「包みますか？」

「ああ、頼む」

箱を返すと、クリスは手慣れた様子で布に包み始めた。手は正確に動きながら、ちらりところちらを見上げてきた。

「あの髪の長い人へのプレゼントですか？」

「ああ」

クリスは以前エドウィンに会っている。会話はしていないが、箱の中身から誰へのものかは察せられるだろう。

ほとんど包み終え、あと少しというところで、クリスは手を止めた。視線をおずおずと揺らし、頬を薄く色づかせる。そのくせ、口の端が引きつっていた。

「あの、その、その方は恋人なんでしょうか……？」

「はっ？」

「えっと、違う？」

「あ、ああ。世話になったから、その礼だ」

まさか、恋人への贈り物と受け取られるとは思わなかった。身につけるものは、そういう意味で見られがちなのだろうか。

ジンとエドウィンの関係はあくまでビジネスだ。色恋が絡む関係ではない。それに、彼は恋愛そういったものにどこか忌避感があるようにも見えた。これからも一緒にいる相手に、余計な警戒をされたくない。

変かと問うと、クリスは首を振った。確かに身につけるものは恋人へ贈る定番だが、友人同士で贈ることもあるという。

「なにか意味があるのか？」

その疑問に、クリスは照れたようにはにかんだ。先程までのこわばりもなく、自然な笑顔だった。

^{いわ}曰く、身につけるものは常に一緒にある。だから『いつでも自分の存在を感じてほしい』という意味で恋人へ贈る定番なのだ、と。ネックレス、指輪、時計などがよく選ばれるらしい。

教える口調がどこか浮ついているのは、そういった話題が好きなためだろう。こういう年頃はそういうものなのかもしれない。あいにくジンには比較できる記憶がないが。

微笑ましいが、ジンが贈り物を用意した真意は色恋とは違う。「残念だったな」と言えば、「いえ、むしろ……」ともごもごと返されたが、うまく聞き取れなかった。

品物を受け取って懐へしまう。ちょうど別の客が入ってきたので会話を切り上げ、最後に見上げてくるクリスの頭を撫^なでた。

「最近、人さらいが出るらしいから気をつけろよ」

「えへへ。はい、お父さんにも言われました」

さっき聞いたばかりの噂を伝えたと、少年は
にこにこ^{うなず}と頷いた。

懐の包みを意識しながら歩く。これからまた、
日が暮れるまで聞き込みだ。渡すのは夜でいい。

ジンはここ数日で見慣れてきた雑踏を進む。
ここは前の場所——クレイドナよりも活気があ
る。エドウィン曰く、気候が安定しているうえ、
《欠けたもの^リの^レ》による防衛も充分で、国を疲弊
させるような事態が起こりにくいらしい。冒険
者に対応が難しい凶暴な魔獣に、《欠けたもの^リの^レ》
が出ることもあるという。冒険者ギルドとして
は商売として微妙だが、民が安全を^{おうか}謳歌できる
というのはきっと良いことだろう。そういう意
味でも国民は《欠けたもの^リの^レ》に一定の敬意を抱
いているようだった。

初めてこの国に足を踏み入れた時以外にも、
制服を着た者たちの行進——意図したものでは
ないだろうが——を何度か見かけた。人々はき
ゃっきゃと騒ぎ、まるで英雄か憧れの対象を見
るような目を向けていた。

表面だけを見れば、《欠けたもの》が生きやすい国だ。国が喧伝^{けんでん}するように——《欠けたもの》の理想郷のようにも思える。

そもそも《蜜》^{ネクト}さえあれば《欠けたもの》は優秀な人間なのだ。ただ《蜜》がなければ狂い、人間という天災になってしまう。だからこの国の《欠けたもの》の扱いは、そう間違っていないように思える。力あるものが力ないものを護り、代償として力ないものは力あるものを敬い、報酬である金と《蜜》を与える。

それが《欠けたもの》のすべてに対して行われるなら、まさしく理想郷だったかもしれない。だが報酬は一部にしか回らない。力あるものの中でも、さらに力あるものにだけ。すべての《欠けたもの》を養うには《蜜》が足りないという。《華弁持ち》^{ラ ヴ ァ ル}が足りない。

ジンはぼんやりと、もう何回目かも分からない疑問を抱く。

——なぜ、《欠けたもの》や《華弁持ち》というものが生まれるのだろう。

レオンが発作を起こし、あれこれ教えられた

ときは、まだ『そういうもの』として受け止めていた。だがレオンの幼馴染の話聞き、もうひとりの《欠けたもの》——エドウィンに会ってから、考えが変わった。これは当たり前として諦めていいことなのか、と。

思案しながら歩を進めていると、ふっと目の前の相手が視界から消えた。驚いて足を止める。足元で、顔色を真っ白にした男が崩れ落ちていた。はっと我に返り、ジンはしゃがみ込んだ。

「おい、どうした?!」

男——いや、少年と言ったほうがいいのだろうか。かぶっていたフードがずれ、金に輝く髪がこぼれている。人通りの少ない路地なのか、人影はまばらだった。周囲の者たちは遠巻きに見るばかりで、近寄っては来ない。

華奢^{きゃしゃ}な背に手を当て、横たわった体を起こして、もう一度問いかける。

少年が薄っすらと目を開いた。夏空のような青い色が見えた。

少年は震える手でジンの腕を掴^{つか}み、「もんだいない」と呻^{うめ}いた。身を振^{よじ}って起き上がろうと

するが、力が入らないのか立ち上がることができない。

ジンが医者と呼ばうと身を動かすと、「やめろ」と少年はふるふる首を振った。眉を寄せたが、その切実な瞳に押されて動きを止める。医者は呼ばない。だが、このまま道の真ん中に寝かせておくこともできない。

ジンは少年を抱え上げた。

「なっ」

抗議のような声がした気がしたが無視する。周囲を見回し、遠巻きの視線から外れる場所を探した。人目を避けるようにして、少年を運んだ。



その日、目を覚ました瞬間から体が重いと感じていた。窓の向こうは青空だというのに、ルークの調子は最悪だった。眉を^{しか}顰めて起き上がり、召使いが運んできた薬を規定の倍、喉奥へ流し込む。もの言いたげな視線を感じたが無視

した。もう何度もこの目で見られた。しかし、はじめの一、二度こそ心配の言葉めいたものがあったが——口先だけだ——ルークが「口出しをするな」ときつく言ってからはなくなった。そのかわり、ただ責めるような視線だけよこしてくる。

召使いが一礼して部屋を出ていくのを、鼻を鳴らして見送る。

薬が効いてきたのか、僅かではあるが体は言うことを聞くようになる。それでも不快が消えるほど滑らかには動かない。

不調はここ数ヶ月続いていた。原因は分かっている。薬が合わないのだ。

ひろびろ
広々としたベッドから降り、上着を脱いだ。途端、黒いものが視界に差し込む。左肩を起点に、胸の下あたりまで黒い^{あざ}痣が覆っていた。

ルークは鏡台の前に立った。陽を浴びて金に輝く髪と、青い目の少年が映る。肩まで伸びた髪はしなやかで、長い^{まつげ}睫毛が光を散らす。まるでビスクドールのようなだった。これでももうすぐ成人だというのに、体は薄いまま、あまり筋

肉がつかないのが密かな悩みでもあった。城下で『お人形さん』と囁^{ささや}かれているのも知っている。多くは好意だが、嘲笑を混ぜる者もいる。どちらにも笑顔で応じてやっているが、ビスクドール、であることを望んでいるわけではない。

白く透き通る肌に、黒い蛇のような痣^はが這う。ルークにこの広々とした部屋を与えた痣だ。

丁寧^{ていねい}に世話をされ、ささくれひとつない指で痣を撫でる。毎日この痣を観察するのが、ルークの日課の儀式だった。

「やっぱり、増えてる……」

ひとりしかない部屋に、その眩^{つぶや}きが思った以上に大きく響いた。

痣は、ルークが特別な存在である証だ。人々に敬^{かし}われ、傳^{つた}かれる存在である証。

視線の先には国から支給された制服が掛けてあり、胸元には星が四つ並んでいる。五つある等級の上から二番目。頂点がひとりしかないことを思えば、十分な地位だった。同列は他に二人いるが、いずれもルークの価値とは競合し

ない。

ほんの数ヶ月前まで、ルークを脅かすものはいなかった。ルークは己の価値にふさわしい対価を受け取り、その中には痣に殺されないための十分な薬も含まれていた。

《欠けたもの》の多くは、《華弁持ち》から直に《蜜》を得る。薬よりも《蜜》の方が効力が高い。そのため、地位が高い者ほどそれを望む。

しかし、ルークは好まなかった。

ルークは国にとって価値ある《欠けたもの》だ。望めば対価を薬という形で得られる。今まではそれで足りていた。けれど最近は、陰り始めている。

左肩に拳ほどだった黒い影は、今や上半身の半ばまで広がっていた。全身の五分の一ほど。地位にある者としてはありえないほど広い。定期検診で発覚し、当然問題になった。

いつもの服に身を包み終えたころ、扉がノックされた。ルークは嫌々^{いやいや}ながら返事をする。

「——これはこれは、ルーク様」

揉^もみ手^みをしながら入ってきたのは、背の高い

瘦身の男。のっぺりと髪を撫でつけた、計算高そうな男だった。

ルークが露骨に顔を歪^{ゆが}めても、男は気にせず、ずかずかと踏み入り、全身を舐^なめるように見回したあと、挨拶のようにいつもの言葉を吐く。

「おや顔色が優れない様子。直接に《蜜》を啜^{すす}ったほうが良いのではないのでしょうか？」

にこにこ蛇のように笑いながら、男は腰へ手を伸ばしてくる。そのまま肩を掴まれ、生ぬるい体温が滲^{にじ}んできた。ぞっとして鳥肌が立つ。ルークは嫌悪を浮かべ、男の手を叩^{たた}き落とした。

「僕に触れるなっ！」

青白い顔で睨^{にら}むと、男は一瞬だけ不快そうに眉をひそめ、しかしすぐ笑顔を作り直した。そのわざとらしさが気に障る。

「必要ない。薬も飲んだ」

「……ですが美しいかんばせが曇っておりますよ？」

男が素早く頬へ手を伸ばし、ルークが身を引くのを見て目を細めた。結局触れずに手を下ろす。二度も叩かれたくなかったのだろう。

「必要ない……！」

「おやおや、私は心配しているのですよ」

「僕に貴方の《蜜》は必要ない！ 出ていってくれ！」

ルークの剣幕に、男は物分かりの悪い子供を相手にするように、わざとらしく肩をすくめた。

「どうやら王子様の機嫌はよろしくないようですね。……それではまた後で顔を出します」

にこり、と。最後に唇を吊り上げ、男は出て行った。

男——己にあてがわれた《華弁持ち》が消えると、どっと疲れが押し寄せた。ルークはベッドに腰を下ろす。

一月ほど前、あの男はルークのための《華弁持ち》として引き合わされた。奴の相手はルーク以外にもいるはずなのだが、その中でルークが最も地位が高いせいか、それからほとんど毎日顔を合わせている。

最初は廊下で呼び止められるだけだった。断れば次は仕事場で。それでも拒み続けると、ついには私室へ現れるようになった。召使たち

が止めないということは、上が許しているのだ。

納得できない。だが抗議して^{やぶ}藪から蛇を出したくはない。上の命令に、ルークは拒否権がないのだ。

先程の様子をみるに、今日もきっと仕事終わりに現れる。憂鬱な息が漏れた。この体調で相手をするのは避けたい。どうすれば――。

そこで目に入ったのが、ベッドの端に放り投げてあったローブだった。貢物の中でも地味で面白みがないという理由で部屋着にされているそれには、フードが付いている。

ルークの頭の中で己の持つ衣装を広げる。それらの中から、市井に出ても比較的問題のないものをいくつか拾い上げて頷いた。あの男が諦める時間まで外へ出よう。

――そうしてルークは、仕事が終わってすぐ、城から逃げ出した。

はじめは良かった。窮屈な場所から抜け出した開放感で、足は自然と速くなった。

この国は観光も売りにしているせいか、大通

りは人で^{あふ}溢れていた。目深にかぶったフードの隙間から、きょろきょろと周囲を見回す。

ひとりで外に出たのは、子供のころ以来かもしれない。いつもは護衛がぴったりついてくる。

漂ってきた安っぽい油の匂いに、思わず鼻がひくつく。腹が鳴った。普段なら候補にも上がらないが、たまにはいいだろう。

ルークは一番大きな硬貨で屋台の店主を困らせつつ、串肉をひとつ手に入れた。人に押し流されないよう端へ寄り、端から^{かじ}齧る。

「……ふうん」

安っぽい味がした。調味料は雑で、肉は筋張っている。そのせいで、力いっぱい^か噛まねば噛み切れない。ここ数年、一級のものばかり口にしてきたルークには、お世辞にも美味しいとは言えなかった。

それでも、悪くはない。少なくとも今は許せる気分だった。そう時間はかからず、肉はすべて腹へ収まった。

安い油で胃がもたれる気もしたが、心配はいらないだろう。せっかくだから他も見回ろう

と、しばらく歩いていた途中だった。

はじめは妙に寒気がすると思った。気のせいだと無視していると、次に目眩^{めまい}がした。頭蓋の奥から脳を押し出されるような吐き気が込み上げる。ふらり、と思った方向とずれて足が着地して、これは無視できるものではないと認めざるを得なかった。

俯^{うつむ}き、ふらふらと歩くルークを、周囲の人々が好奇の目で見ると。そこから逃れるように細い道へ入った。行き先があったわけではない。ただ、この姿を誰にも見られるわけにはいかないと思った。

大通りより人の少ない道へ出て、そこからさらに人のいない方へと進む途中、不意に地面が沈んだ。いいや、違う。ルークの足から力が抜けたのだ。

気づいたときには、体をしたたかに打ちつけていた。さきほど食べた肉が喉元までせり上がる。気持ち悪くて目が開けられない。地面にしているはずの手のひらは、冷たさも熱さも感じない。気づけば音も遠い。そこで、遅れて恐

怖が芽を出した。

しかしそれが膨らむ前に——体が誰かに支えられた。

奇妙なことに、触れられている場所だけ温度があった。薄く目を開くと、ルークより少し上の男が心配そうに覗き込んでいた。黒曜の目だ。その瞳に浮かぶ色を見たとき、なぜか心臓が小さく震えた気がした。

震える手を伸ばし、男の腕を掴む。五感が少しずつ戻り、苦しかった呼吸がわずかに楽になる。

混乱で空回っていた思考も、少しだけ戻る。はくはくと口を動かし、なんとか「もんだいない」と絞り出す。さっさとどこかへ行ってしまう。

それでも男は動かない。苛立ちながら体を起こそうとするが、地面を蹴るだけで終わった。

男が医者と呼ぼうとした。

掴んだままだった腕に力を込めて止める。医者など呼ばれれば外出が露見する。警告ならまだいい。そうでないならば、監視がつくか、最

悪の場合、謹慎となる。

引き止める力は弱かったはずだが、幸い男には伝わったらしい。戸惑いながらも支える手に力が入る。

不意にルークの体が宙に浮いた。抱え上げられたのだ。驚いて声が漏れ、掴んだ手に力が入る。護衛であっても、ルークにこんな無礼を働く者はいない。

だが男の歩みは思った以上に安定していた。それが抵抗心を萎ませた。ルークは彼を知る人間がこの場にいれば驚くほどおとなしく運ばれ、しばらくしてそっと降ろされた。

そこは小さな階段の隅だった。男の上着の上に座らされる。

「すこし待っている」

男はそう言うと、さっと身を翻した。

遠くにざわめきは聞こえるが、視界に人影はない。日が陰り始めた時間帯。ルークのいる場所だけ、まるで世界から切り離されたように影になっている。これならば、目を向けられただけではルークとは気づかれないだろう。

しばらくして男は水を持って戻ってきた。ルークの前にしゃがみ込み、差し出す。

受け取ろうとしても指に力が入らない。取り落としそうになったところを男が防ぎ、そのまま支えるように口元へ運んだ。

飲み込むまでは必要だと思っていたのに、喉へ滑り落ちる水は思いのほか爽快だった。最初は舐めるようだったのに、最後には喉を鳴らして飲んでいた。

「あっ」

焦って水がこぼれた。口元から胸まで濡^ぬらす。慌てて拭こうとするが、ルークより先に男が動く。子供相手のように、懐から出したハンカチで拭われた。

思わず頬が熱くなる。怒鳴りつけてやろうとしたが、出たのは咳^{せき}だった。勢いよく呻^{あお}りすぎたらしい。水が気管に入ったのか止まらない。

男は困った子供を見るような目でルークを見た。羞恥がさらに膨らむ。いつものルークなら頬を張っていただろう。

だが、むくむくと育ちかけた怒りは男の瞳を

見た途端、急にしぼんだ。

男はまっすぐルークを見ていた。理由は分からない。けれどその瞳が、遠い昔——何も知らず、幸せでいられた頃を思い出させた。

胸の奥の奥、もう触れないと決めて封じた箱が、ふいに目の前へ現れたような気がした。その懐かしさに気を削がれて、ルークは男が背を撫でるのをおとなしく受け入れた。

いつの間にか凍えるようだった体が熱を取り戻している。触れられた場所からじんわり熱が伝わってくる。心地よい、とさえ感じてしまい、ルークは心の底で小さく首を傾げた。

なぜ自分は、この男に気を許している？

ルークは基本的に人を信用しない。《欠けたもの》だからでもあり、生まれつきの性質でもある。誰かに無防備に背を預けるなど、本来ならありえない。助けられたとはいえ、先ほど出会ったばかりの男に。

逃げようと思えば逃げられる。目眩はほとんど消えていた。魔法は得意分野のひとつだ。軽く相手をひるませ——全快したわけではないた

め多少もたつくかもしれないが——その隙に逃げることはできる。

それが分かっているのに、そんな気は起きなかった。むしろ男の手を心地よいと感じることに戸惑いを覚える。それでも、その手を振り払えなかった。

ルークが立ち上がったのは、それからしばらく後だ。気分の悪さはすっかり消えていた。むしろ体が軽くなった気さえする。

男はルークの顔を覗き込み、安心したように笑った。

「もう大丈夫そうだな」

そうして、そのまま去っていこうとするのを、思わず袖を掴んで引き止めた。

「どうした？」

「……………その、助かった」

なにか言わねばと思ってすぐ、礼を言っていないことに気づいた。だがこういうとき、どう言えばいいのか咄^{とっさ}嗟に出てこない。

男はルークの部下ではない。ただの通りすがりだ。フードに隠したこの顔を見てもなんの反

応もない。外から来たばかりなのかもしれない。

悩んだ末に出た声は不貞腐れたようになり、内心焦る。それでも男は気にするなと口端を上げ、ルークは心の中でほっと息を吐いた。

短い会話ができたことに背を押されたのか、次の言葉はするりと出た。今度はしっかりと目も合わせる。

「名前は？」

「——ジン」

「ジン——そうか。僕はルーク」

掴んでいた袖を離し、手を差し出す。握られた手は自分より大きく、硬い。剣を持つ手ではないが、ルークのように丁寧に世話をされたそれでもない。きゅう、と少しだけ強く握り、すぐ離れた。

心ばかりの礼として金を渡す。遠慮して断る男に、無理やり握らせた。最後に諦めて大人しくなったのを見て鼻を鳴らし、ルークは背を向ける。

気をつけて帰れよ、という言葉が背中へ落ちた。心配いらないとひらひら手を振る。

ジン——と口の中で呟く。もうきっと会わないだろう。そう時が経たないうちにこの名も忘れてしまうのだと思うと、少しだけ寂しい気もした。

交渉

部屋にジンが入ると、すでにふたりは戻っていた。向けられた視線に、ジンは黙って首を振る。レオンが短く息を吐き、エドウィンが眉尻をわずかに下げた。ふたりもまた、手がかりを掴めなかったのだ。空気が沈む。

この国に着き、幼馴染^{おさなじみ}を探し始めて今日で五日。しかし進展はない。そろそろ打開策を話し合うべきだ——そう口を開きかけたとき、エドウィンがずっと手を上げた。

「私から提案があります」

疲れ切った様子のレオンがゆっくりと顔を上げて、エドウィンを見た。小さく頷^{うなず}いて続きを促す。

「今日まで、なにも情報がありません。三人で

探して五日間、なにもないんです」

「……」

それは三人とも分かっていることだった。次に話を聞く相手なら何か知っているかも知れないと、同じ期待を繰り返し、五日が過ぎた。首都のあらゆる場所を回っても、知っているという者はひとりも現れない。

「方法を変えるべきだと思います」

「具体的にどうする……？」

「冒険者ギルドに聞くべきかと」

きっぱりと言い切ったエドウィンに、レオンは眉を^{しか}顰めた。

「だが守秘義務と言われて追い返されるのがオチだ」

もちろん、最初に冒険者ギルドへ足を運んだ。探し人が最後に消息を断った場所だ。特殊な事情でもなければ、次に向かった先をギルドが把握しているはずだ。国を移動するなら報告の義務があるし、移った先での仕事も記録に残る。

だがギルドは『守秘義務』の一点張りで、情報を開示しなかった。いくらレオンが元チーム

メイトだと訴えても同じだった。相手が《^リ欠^レけたもの》である以上、通常よりも手厚く情報が伏せられているのだろう。自分を守るときには心強い仕組みだが、探す側に回ると厄介だ。食い下がった末に「これ以上の質問はペナルティを課します」と告げられ、引き下がらずを得なかった。

どうするつもりだ、と視線を向けると、エドウィンはにこりと綺麗^{きれい}に笑ってみせた。



その男たちが訪れたのは、ギルドの混雑が少し落ち着いた頃だった。

「ギルド長に重要な話がある」

そう言って受付に現れたのは三人の男だった。

二人は二十を少し過ぎたくらいだろう。受付に声を掛けたのは、無骨で堅物そうな、黒に近い灰色の髪を短く刈り込んだ男。その後ろに、黒目黒髪で不思議な雰囲気^{まど}を纏った男。そして横に、彼らより一回り年上に見える長髪の眼帯

の男が^{たたず}佇む。いずれも顔立ちは悪くないが、特に黒髪の男は目を引いた。特別に目立つわけではないのに、視線を奪う妙がある。

とはいえ、相手が誰であろうとギルド長に簡単には会えない。アポイントはありますか、と受付の男は平時の顔で問うと、灰髪の男が落ち着いた調子で答えた。

「ヴェステルの話だ、と言えれば分かる」

受付の男は、わずかに目を見開いた。

——ヴェステル。

土地の名か、人の名か、あるいは物の名か。受付は知らない。だが、その名を口にされたとき、無条件でギルド長へ取り次げ——そういう決まりがあった。

男は早足に報告へ走り、すぐに「通せ」という指示が返ってきた。受付は三人を案内する。

ギルドの中でも最も造りの良い扉の前——ギルド長の執務室だ——まで連れていき、重い扉の向こうへ入っていく背を見送った。

ヴェステルの話をしたい者が来た、と報告を

受け、エディアスは書類に走らせていた手を止めた。

机の上には書類が乱雑に積まれている。執務は好きではない。現場で暴れるほうが性に合う。だが階級が上がれば、嫌でも書類仕事は増える。それでもぎりぎりまで渋っていたのだが、先日ついに注意を受け、^{しぶしぶ}渋々手をつけ始めたところだった。

——ヴェステル。

語り継がれる勇者の本当の名だ。^{ちまた}巷では別の名で親しまれているが、本来はこちらが正しい。ほとんど知られていないうえ、世間が知る通り勇者は《欠けたもの》だった。

エディアスは親指で、白髪の間違った眉間を押した。あまり良くない記憶が^{よみがえ}蘇る。現場で一生を終えるのだと信じてきた自分を変えた《欠けたもの》の存在を。そして救えなかった《欠けたもの》の存在を。

入室を告げるノックのあと、入ってきた者たちを見て、エディアスは少しばかり驚いた。

——三人？

ひとりは分かる。入国が確認された時点で送られてきた資料に目を通した。ギルド長にしか分からない書き方で、そこには『《欠けたもの》』と特記があった。

《欠けたもの》の生き方は大きく二つある。国に仕えるか、冒険者ギルドに登録するか、だ。

国に仕えれば《蜜》の代わりに自由を売ることになる。それを嫌う者が、冒険者ギルドに登録する。

どこの国でも《欠けたもの》は見つけ次第、報告の義務がある。報告者には最低限数カ月は困らないほどの報酬を与えられる。そして、見つかった《欠けたもの》は翼を折られ、一生を国に^{ささ}捧げことになる。

それを回避できる唯一の方法が、冒険者ギルドへの登録だった。

登録していれば、《欠けたもの》だと正体が知られても国の要請を突っぱねられる。それは勇者がギルドに残した遺産のひとつだった。

もちろん国とは違い、ギルドから《欠けたもの》を侵す病の治療薬——《蜜》^{ネクト}を与えること

は難しい。だが長く続く不自由な牢獄^{ろうごく}より、短くとも自由に空を飛びたいと願う者はいる。彼らは《欠けたもの》であることを秘すよう求める。当然だ。世間にとって、彼らは国に管理されているからこそ`安全、であって、野放しにすることは時限爆弾が歩いているようなものだからだ。そのため、止むを得ぬ事情——すでに国に公表されてしまった場合など——がない限り、秘密を守り『普通』の人間と同じように扱うのがギルドの務めだった。登録者が《欠けたもの》であると知るのは、各地域のギルド長だけである。

もっとも、《欠けたもの》の総数は少ない。ギルド長の任期で実際に接したのは片手で数えられる程度だ。

それが、三人。

一人はすでに登録しているとして、あとの二人まで《欠けたもの》だということか。

エディアスは入室した男たちを眺める。

皆、方向性は違えど端正な顔立ちをしていた。——《欠けたもの》は、なぜか造形が整ってい

ることが多いことは、周知の事実だ。

エディアスは執務机を離れ、面会用の机の前に立った。手で正面の椅子へ促し、彼らが座るのを待ってから自分も腰を下ろした。盗聴と透視を妨害する魔法具をいくつか確かめ、息をつく。緊張の^{にじ}滲む男たちを真顔で観察したのち、にやりと笑った。重苦しかった空気が、ふっと軽くなる。

エディアスが名乗り、彼らも名乗った。盗聴も透視も心配ないと前置きし、切り出す。

「で、ヴェステルの話だって？」

「っああ」

一瞬、気圧された風の男——レオンが頷いた。エディアスはこれでも数年前まで現役で現場を走っていた。今でもたま現場へに出る。年季も、くぐってきた修羅場の数も違う。それらが全身から圧として立ち上る。まだ三分の一も生きていない若造が気圧されるのは当然だ。それでも一瞬で我を取り戻すあたり、見込みはある。

「新たに、登録をしたい」

「ん。お前はすでに登録してたよな。じゃあ、

このふたりか？」

《欠けたもの》が《欠けたもの》を連れてくるのは珍しくない。迫害される者は、同じく迫害される者を敏感に感じ取る。先達がギルドを紹介し、《欠けたもの》として登録する。それ自体はよくある話だ。……一度にふたりというのは多いが。

しかしレオンは「違う」と首を振った。だがすぐに、

「いや、ある意味ではそうだ」

と覆す。その曖昧さにエディアスは眉を寄せる。遠回しなやりとりは好きじゃない。

「彼——エドウィンを、俺と同じように登録してほしい」

ならもうひとり——ジンは？ という疑問は当然浮かぶ。だがひとまず、彼に合わせる。問答はあとからいくらでもできる。

会話をレオンに任せ、静かに座っていたエドウィンを見る。三人の中で最も年長だ。歳は……見たところ三十前半か。飾りのない黒の眼帯は威圧感を与えるが、柔和な顔立ちがそれ

を和らげている。目の下に薄い隈^{くま}はあるものの、伸ばされた髪はさほど傷んでいない。この年齢で《蜜》を得られない《欠けたもの》なら、生きているだけで奇跡だ。末期であってもおかしくない。だが疲れはあれど、己にもうすぐ終わりが来るのだという悲壮は感じなかった。

ならばどこかの国に仕えていたのか。よほど優秀なら十分な《蜜》を与えられる。そういう力の強い者は、《欠けたもの》であってもある程度の自由が許されるはずだ。国に仕えながら幸せに暮らせる一握り。わざわざ浮き沈みの激しい冒険者ギルドに登録するより、そのまま国にいたほうがよほど良い暮らしができる。ギルドに来るのは、その一握りからこぼれた大多数だ。

だが背景がどうあれ、求められれば手を貸す。それが勇者を生み出した冒険者ギルドの矜持^{きやうじ}だった。

エドウィンの話では、彼は特別優秀というわけでもなく、十数年前に国に仕えたきり、今まではどこにも所属せず生きてきたらしい。なら

ば守護を望むのも分かる。だが、なぜいまさら。
「すでに登録者がいるから分かっていると思う
が、ギルドからの《蜜》の融通は難しいぞ」

できないわけではない。五年ほど前から、
《華弁持ち》と直接やりとりせずとも《蜜》を
摂取できる薬が裏で出回り始めた。だが希少な
それは相応の対価を要する。つまりは、簡単に
手を出せないほど高価だ。ギルドとしても優秀
な《欠けたもの》は失いたくない。借金を認め
てまで手に入れることはあるが、数は限られる。
無情だが結局、力ある者——金を出せる者しか
生き残れない。つまり自由を許された冒険者ギ
ルドだとしても、優秀な者が生き残るのだ。

エディアスの忠告に、エドウィンはあっさり
理解を示した。ならば、と話を進める。

「進行度は？」

《欠けたもの》の特徴は、全身へじわじわ広
がる^{あざ}痣だ。面積が広いほど、人としての理性を
失い狂う確率が上がる。進行度とは、その痣が
覆う範囲のこと。体の一割が痣に覆われれば、
進行度は「一」となる。そしてエドウィン

は……

「七だ」

「……！　ぎりぎりじゃねえかっ！」

エディアスは眉間に深い皺^{しわ}を刻んだ。進行度七は、ほとんど死の寸前だ。ギルドの規定でも、七までは条件付きで登録を認めている。

エディアスは、そこまで痣の広がった《欠けたもの》を知っている。ひどく淀^{よど}んだ瞳をしていた。痣が広がるたび、自分から何かが流れ出すのを感じると言っていた。それが恐ろしくて仕方がないのだ、とも。毎晩眠るのが怖いのだと歯の根を震わせていた。痣が広がるほど、流れ出すものは増え、恐怖が膨れ、理性が削がれ、やがて狂気が顔を覗^{のぞ}かせる。周りがどれほど心を痛め、行かないでくれと懇願しても、立ち止まってはくれなかった。彼の最期を、エディアスは忘れられない。

だが目の前のエドウィンの顔には疲労はあれど、恐怖はなかった。嘘^{うそ}の申告とは思えない。調べれば分かることだからだ。しかし、ならばどうということだ——そう思って、すぐにはっと

した。この場にはレオンとエドウィンのほかに、もうひとり。黙ったままの男がいる。彼が何者かはまだ分らない。だが長年己の命を救ってきた勘が、間違いないと囁^{ささや}いている。

「……それで、もうひとりは？」

レオンの目が、きらりと光った。

「その前に、もう一度確認したいことがある」

エディアスは片眉を上げた。交渉の主はギルド長であってレオンではない。そもそも彼らはギルド腸に頼み込んでいる側だ。立場の差は言わずとも分かっているはずだ。

不快が顔を覗かせたが、だが聞くだけなら聞こうという態度で先を促す。

レオンが確認したいと言ったのは、保護した者の扱いだった。

秘密は公にしない。もし漏れた場合は優先して対処に当たる。そして登録した者は、たとえ国の要請があってもギルドが護る。

つまりギルドを信頼して打ち明けた者には、ギルドも信頼で返すという決まりだ。

なにを当たり前のことを。彼自身、《欠けた

もの》としてそれを身をもって知っているはずだ。だが裏返せば、もう一度確認せねばならないほどの重大さが、残った男——ジンにあるということだろう。

「間違いはないか？」

「ああ、もし破られたら、オレの椅子と全財産をやってもいい」

神経質に確認する若造に、エディアスは^{おうよう}鷹揚に頷いてやった。だが、そこまでして守る価値がジンにあるのか。問いたですようにじろりと^{にら}睨みつける。——その視線は、ジンが服をまくり上げて見せた瞬間に凍りついた。

「……!!」

思わず息を止めた。そこには、エディアスがかつて切望し——そして得ることが^{かな}叶わなかったものがある。

理解したことを見て取るや、ジンは即座に服を戻した。それでもエディアスは、隠れた胸元から目を離せなかった。花卉の形の痣がひとつあった。——《^{ラ ヴ ァ ル}華弁持ち》だ。

なぜ《華弁持ち》がここに？ 確かに冒険者

ギルドは《欠けたもの》と同じく《華弁持ち》にも門戸を開く。しかし創立以来、《華弁持ち》が登録された例は一度きり。それも遠い昔、勇者のいた時代だ。

そもそも《華弁持ち》は《欠けたもの》と違い、生まれた時より痣を持つ。どの国でも花卉の痣を持つ赤子が生まれれば国へ届け出る義務がある。両親が望まなくとも、立ち会った医者が報告を上げる。報告者には報奨を、そして花卉の赤子には不自由な生活が与えられる。よほどの事情がない限り、国に知られず《華弁持ち》が成人することはない。

それなのに、エディアスの目の前にそのあり得ざる存在がいた。

「国の登録は？」

「していない」

「どうっ……いや、聞かないでおこう」

どうやって今まで無事でいられたのか——そう問おうとして、エディアスは口を^{つぐ}噤んだ。
^{たいじ}対峙する彼らの目に、拒否の色があったからだ。
だがギルド長として、これだけは聞かねばなら

ない。

「どこかの国に追われていたりは？」

「していない」

《華弁持ち》を逃すのは国の損失だ。もしどこぞの国から逃げてきたのであれば噂^{うわさ}が立つ。ギルドとしても、その手の噂は聞いていない。

静かに黙るエドウィンに視線を移して、はっとする。

「——なるほど。そいつがいるなら、進行度が高くとも問題ない、か」

ジンという《華弁持ち》がいれば、エドウィンの余裕も頷ける。身近に《蜜》を与える存在がいるのだ。己を見失う恐怖^{おび}に怯えなくて済む。

さすが支部を任されるだけある。エディアスの混乱からの立て直しは早かった。

そして、ジンを見つめたまま思考を巡らせる。《華弁持ち》がギルドに登録するのは前代未聞だ。過去の一例は遠い昔過ぎて記録が残っていない。名目上は《欠けたもの》と同じ扱い——機密であり、ギルドの規律の範囲内で自由であり、時に援助の対象——だが、《華弁持ち》な

らば、ギルドから彼らへではなく、彼らからギルドへ、依頼の達成以外のものを願えるのではないか。かつて喉から手が出るほど欲したもの——《蜜》を。

湧き上がる熱を抱えたまま口を開きかけた、その前に。

レオンが先に声を掛けた。

「もう一つ話がある」

「おいおい、まだあるのかよ……」

出鼻をくじかれつつ、エディアスは気づかぬうちに乗り出していた身を元に戻した。交渉はさほど得意ではないが、冷静さを欠くわけにもいかない。おどけるように両手を上げ、もう腹いっぱいだ、とでもいう仕草をしてみせる。だがレオンは構わず続けた。

「花を持つものがいなくとも、どうにかする『葉』があることを知っているか？」

「……ああ、何度か取引をしたことがある」

エディアスは頷く。実際、主体として取引に関わったことも何度かあった。

《欠けたもの》は爆弾であると同時に、有用

な兵器でもある。国でもギルドでも、それは変わらない。優秀なギルド員の寿命を延ばすため、裏に手を伸ばすことがある。だが手に入るかどうかは運次第で、安定した供給は望めない。

そもそも薬は、国に所属する《華弁持ち》の小遣い稼ぎだ。小遣いというには随分割高だが。それが国へ露見すれば重い罰を受ける。リスクに対してリターンが少ない。賢い者ほど手を出さないか、^{そうそう}早々に手を引く。そしてそれは、この国では、特に。

エディアスは過去を思い、皮肉げに口元を^{ゆが}歪めた。自分もかつて、なんとしてでも手に入れるのだと切望した時期がある。今のエディアスには、その「理由」はもういない。だが薬が流れるという噂を聞けば、今でも可能な限り手を伸ばす。理由がなくとも、かつての自分と同じように望む者がいる。あのときの自分と、そして彼と同じ思いをさせないために手を貸すのは当然だった。

とはいえ、その薬は熱望したところで簡単に手に入れられるものではない。

だがレオンは、驚くべきことを口にした。

「——それを俺たちが提供できると言ったら？」